

『淫心 -身代わりオメガは愛に濡れる-』

著：高月紅葉

ill：笠井あゆみ

「あっ……あ」

失うまいとして掴む理性が、裏腹に、自分の媚態をまざまざと実感させた。

羞恥は毒の如くゼファを苦しめ、歪む表情を暴かれ、大きく開かれた足の間を覗かれる。

「どうか……」

震える声で訴え、恥を忍んで、腕にすがりつく。触れようとしてくる指を拒み、自分の手で秘所を隠した。なぜ、陰部が興奮を見せるのか。ゼファには理解できない。

快感よりも羞恥が勝り、羞恥よりも恐怖におののいている。

それなのに、息は乱れ、男性の象徴は脈を打って芽吹く。なぜと問いたかったが、答えは返るはずもない。

ゼファを犯そうとしているエドラントは、涼やかな目元をわずかに歪めた。形のいい眉が片方だけ引き上がる。

いかにも億劫そうな素振りだ。ゼファの腕を振りほどき、寝具へ押しつけた。

ゼファの髪が広がり、淡い栗色の先端がゆるく波を打つ。

「震えることはない。優しくしてやろう」

ささやきかけてくるエドラントの声は、言葉と真逆に冷たく聞こえた。

けれど、ゼファの肌は熱く燃えてしまう。胸が締めつけられるような苦しさ、腰の内側から滲み出すせつなさ。

アルファの息遣いの中に混じる興奮に煽られ、未知の本能が焚きつけられる。

「……いや、です」

ゼファは、声を振りしぼって身をよじった。絹のガウンがいつそう乱れ、白い肩があらわになる。

「おまえがどんなに淫らでも、理由ははっきりとわかっている。心配するな。それは、私がアルファだからだ」

勝ち誇るでもない声だ。エドラントの大きな手のひらが、ゼファの骨張った肩を包む。

「手込めにしようというのではない。今夜限りの快感を分かち合うだけだ」

寝具の布地に乱れたゼファの長い髪が掴まれ、口元に引き寄せたエドラントは目を伏せる。

凜々しい瞳がまぶたに隠れると、ゼファは安堵した。

そして気がつく。オメガであることは、奪われる者であることと同義だ。幼いリルカシュでさえ知っていたから、あれほどに泣いて怯えたのだろう。

ゼファは知らなかった。寝台に引き倒され、のしかかられても、足を開いても、自分が性的な

対象とされている本当の実感がない。

「男であれば、興が削がれて、逃げきれると思ったか」

目を伏せたエドラントは肩を揺らして笑い、なにかを思いついたように黙った。

「……確かに、否定はしない。並の器量なら、人質として面倒を見るまでだったが」

「ならば……」

エドラントの胸を押し返す。無垢なオメガでもわかるほど濃厚なアルファのフェロモンを早く遠ざけたかった。

「そうは行くまい。世間知らずの身代わり姫……。おまえもいつかはアルファに道をつけられる。それが今夜であっても、障りはないだろう。エアテリエの飢えたアルファの餌食になるよりは、よほどいいはずだ」

相手がアルファ王であれば、貞操を奪われても、新たな『箔』がつく。同じ戯れでも、貴族や地主に手を出されてしまうのとはまるで違う。

しかし、他人と抱き合ったことすらないゼファにはわからなかった。『飢えたアルファ』が、いま目の前にいるエドラントとは比べものにならないほど獰猛で容赦がない存在だと、想像がつかないくらい世間知らずだ。

「……おまえからも匂いがする。アルファを誘う、淫乱な匂いだ」

「あッ……」

小さく喘ぎ、ゼファはのけぞる。エドラントの指が下半身に這い、手のひらが象徴を覆い尽くしていた。

「んっ……」

びくっと腰が跳ね、新芽のような性器に芯が通っていく。揉み込まれて脈を打ち、やがて根元から先端へと手筒が動いた。

「はう……ッ」

自慰もしたことの無いゼファの声は、驚きのあまり、みっともなく裏返った。隠しようのない失態に、ぎゅっと目を閉じた。

身体の仕組みについては、書物で読んで知っている。世話係のローマンからも説明を受けた。

男性オメガであっても、そこをしごけば精子を含まない精液がこぼれ出る。そして、アルファと繋がるためには、性器から会陰をたどって、さらに奥、排泄器官でもある場所を使うのだ。

いつかは、とローマンは言葉を濁していた。

「新鮮だな。こんなに色気のない声は、聞いたことがない」

あきれたように笑われて、ゼファの肌はさらに熱を持つ。

「……ま、って……」

息を吸い込みながら訴え、エドラントの手を押さえる。ゼファの指は小刻みに震えていた。

「無理です。できません。……こんな」

「しかし、おまえのここは愛撫に悦んでいるじゃないか」

エドラントの手が淫らに動き、液体の感触が先端に広がる。まるで、エドラントの手のひらから水気が滲み出たようだ。

しかし、実際に潤んでいるのは、ゼファの性器だった。

「……手を貸してみろ」

手首を掴まれ、股間へと引っ張られる。ゼファは驚き、ためらった。

手のひらに押し当てられたものを拒み、逃げようとしたが許されない。しっかりと握らされたのは、ガウンの裾から飛び出たエドラントの象徴だ。根元からそり上がり、幹には蔓草のように血管が浮いている。肉が張り出した先端は猛々しく、液体が滲んで濡れていた。

「おまえの匂いが、こうさせるんだ」

「こんなものは……入りません」

震えながら首を左右に振る。考えただけでも恐ろしく、全身がおぞけだつ。

「それは、さすがに知ってるか。ならば、話は早い」

さっさと済ませようと言わんばかりの口調だ。エドラントが動き、指がすぼまりにあてがわれる。

「濡らしてきたのか」

「準備をしておくように……言われたので……」

「抱かれる気でいたのか、かわすつもりだったのか……。本当はどちらなんだ」

笑いながら聞かれて、言葉に詰まる。

エドラントの『お渡り』が決まり、侍女たちから香油を渡され、準備をしておくように勧められた。浴室で身体を清め、ゼファは教えられた通りに自分自身のすぼまりへ油を仕込んだ。

約束と違うことに対して激昂された挙げ句、手酷く乱暴される可能性も否定できなかったからだ。もし、そうなってもかまわないと、そのときは覚悟していたはずだった。

ゼファが答えないでいると、エドラントがふたたび口を開く。

「いくら未通とはいえ、アルファの匂いを感じているだろう。身体の奥がむずむずしてこないか？ それは欲情だ。おまえの身体はいま、自分の意志とは裏腹に私を欲しがっている。この指を差し込めば、おまえが準備をした以上に濡れてくるはずだ」

そう言って、指先でぐっとすぼまりを押す。ゼファは思わず逃げた。しかし、相手の手管が上だ。指はずくっと差し込まれ、身体の内側に痺れが走る。

「あ、くっ……う」

ゼファが声を漏らすと、エドラントは肩を揺すり、からかうような含み笑いを響かせた。

ずり下がったガウンに危うく隠されているゼファの胸元へくちびるを寄せる。

なにをされるのか。ゼファはわからなかった。

折り重なったエドラントのくちびるが絹地をすべり、ぷくっと膨らんだつぼみを見つけ出す。

「あっ……」

ゼファの身体は硬直した。ガウンごと乳首を卑猥に食まれ、きつく吸い上げられる。エドラントのくちびるが離れると、濡れた布地だけが肌に貼りついた。

「い、いや……」

ゼファは弱々しく訴え、首を左右に振った。しかし、ガウンは左右に開かれてしまう。

胸部があらわになり、エドラントの手は器用に動いた。

打ち震えるゼファの胸の尖りと、腰裏のすぼまりを同時に責め始めたのだ。

「あ、あっ……」

慣れない愛撫を受けた胸が痛みを覚えた瞬間、エドラントの指を噛みしめていたすぼまりがほどけた。ゆるやかに揺れていただけの太い指が、奥へとねじ込まれる。

ゼファは大きく息を吸い込み、逃げ惑うように腰を振った。恥じらいを感じる余裕もない。ただひたすらに恐ろしく、抜いて欲しくて、腕を伸ばした。

エドラントの手首を爪で搔き、すがるように押さえる。

「無理です。むり……っ」

ゼファの瞳から涙がこぼれたが、エドラントは止まらなかった。

指が内壁をぐるりと搔きながら引いたかと思うと、改めて奥へ差し込まれる。

異物を押し込まれていく違和感に顔が歪み、ゼファの浅い息が喉から溢れていく。

「うう……っ、ん……んっ……」

指一本でも耐えがたいと思ったが、抜き差しを続けられるとやがて内部から濡れてきた。エドラントの指は、窮屈ながらもなめらかな動きに変わり、いつのまにか指の数も増える。

それを口に出して知らされ、膝を立てたゼファは羞恥に震えた。

自分が享樂のために差し出された身代わりだと思い知り、覚悟が生半可なものであったことを痛感する。快樂というものを、甘く考えていたのだ。

リルカシュのように幼い子どもには無理でも、自分なら受け流せると信じた。書物にはそう書いてあったからだ。年頃になれば、オメガはつがいを探す。アルファと出会い、道をつけられ、いくらかのヒートを経験してつがいになる。

道をつけたアルファであれば最良だが、相性が悪いと判断されたなら選ばれることはない。決定権を持っているのはアルファであり、エドラントもそのひとりだ。数多くのオメガに道をつけながら、相性の悪さを理由にして、だれのことも愛さなかった。

彼の求める『相性』の条件を、ゼファは必死になって考える。そうやって意識をそらしているうちに、自分を見捨て逃げたローマンを思い出した。

パヴェルの話を受け入れたゼファを激しく糾弾したが、あれはローマンが正しかったのだ。いまとなれば理解できるが、それでも、金目のものを搔き集めて逃げた卑怯さは別の話だ。思い出すと、ふつつつと怒りが湧いて許せない。

「気をそらすな」

ゼファのごまかしに気づいたエドラントの声がして、胸をいたずらにまさぐられる。

「んっ……ふ……っ」

いっそう膨れあがった色の淡いつぼみが、さすられ、弾かれ、こねられた。エドラントの愛撫は淫靡だ。望んでいない熱がゼファの身の内に募る。

「あ……あ、あ……」

物思いに逃げることも許されず、快樂のただ中へと引き戻された。

ゼファがこれまで知ることのなかった感覚は、めまいがしそうなほど後ろ暗い。受け入れてはいけないと思う反面、拒みきれずに頭の中が痺れていく。

胸の突起を刺激されているだけなのに、引きつけを起こしたように息が乱れ、細い喘ぎを絞り出してしまふ。ゼファは手の甲をくちびるに押し当てた。

視線を天井にさまよわせ、胸をせわしなく上下させる。

「あっ……、もう……もう……」

哀願の続きが継げず、胸の奥もざわめく。

「ここが好きか。ずいぶんと敏感だ」

若々しさの中にも、ねっとりとした卑猥さを滲ませ、エドラントが笑う。慣れた行為なのだろう。生まれて初めて快感を知るオメガの姿も、彼にとっては珍しくない。

しかし、ゼファにはすべてが初めてだった。

「あっ……あ、あぁっ……」

初めて与えられる快感に怯え、背を丸める。

すると、胸の突起をキュッと強くひねられた。

「あぁっ……！」

いきなりの刺激に、ゼファの背中が大きくしなった。指を差し込まれた場所が、息をするように広がり、またすぼまっていく。

エドラントの手が、ゼファの膝の裏をすくい上げた。指とは別のものが押し当てられる。

「あっ……」

破瓜の瞬間を予感したゼファは、両手を寝具の布にすがらせた。上半身を起こして逃げようとした身体に、前へと進んだエドラントの逞しい腕が回る。

視線が真正面からぶつかり合い、ゼファの心臓が音を立てた。濃厚で甘酸っぱい匂いに包まれ、意識までもが朦朧と怪しくなってくる。

けれど、心臓はうるさいほどに鼓動を響かせた。天井がぐるぐると回転を始める。

抱き寄せられ、男の肩がくちびるに押し当たった。重なり合った肌の感触にゼファは怯え戸惑った。丸々とした先端が、指で慣らしたすぼまりを押し、ぐいっと開かれる。

身体がのけぞり、指先は寝具の布を強く掴む。抵抗の術はなかった。

指とは比べものにならないエドラント自身が、入ってくる。

濡れているのは、ゼファのすぼまりか、それとも、エドラントの杭なのか。ぬめりが音を立て、みちみちと肉が引き裂かれるような感覚を、ゼファはひとりで味わった。

卑猥に開かれていく隘路は、元へ戻ろうとする力でエドラントを締めあげる。とうてい、根元まで入るものではない。腰を揺られたゼファは、息も絶え絶えになりながら、エドラントの胸を片手で押し返した。

「くる、し……」

「ずいぶんと、狭い」

はぁ、とエドラントは息をついた。凜々しい眉根が引き絞られ、片目が細くなる。

「深く息をしてみろ」

なだめるような声で言われ、ゼファの瞳から、ほろほろと涙がこぼれる。出会って初めて、優しい声を聞いたような気がしたからだ。

ただそれだけのことに心が慰められ、子どものように肩をすくめて首を振る。

「……できなっ……い」

栗色の髪を振り乱すと、くちびるの端を引き上げたエドラントがかすかに笑った。

ゼファにはそう見えたのだ。互いのくちびるが重なり、いきなり舌が差し込まれる。

「んん、んん……ッ」

生温かな肉片が絡まり合い、唾液がくちびるの端からこぼれるほど掻き回された。

「は……、はあ……ッ」

ゼファは、溺れた人間が水面から顔を出したときのように、大きく息を吸った。幸運にも、ここは陸地だ。水が流れ込むことはなく、代わりに新鮮な空気が送り込まれる。

もっと息がしたいと、唾液を飲み込む。そのとき、何も考えずに、エドラントの舌を吸った。逃げ遅れた肉片の、ほんの先端だ。

ゼファの身体の中で、差し込まれたエドラントの肉がびくっと跳ねた。

「んっ……」

驚いて離れようとしたゼファの身体が、エドラントに抱き寄せられる。

去っていこうとしていたエドラントの舌先は、またゼファを求め、首の後ろへ手が回った。

「ん……っ、ん……あ」

息を吸い込もうとしては震えるゼファへくちづけを繰り返しながら、エドラントはのしかかった姿勢で片手を寝台へつく。

腰がゆるやかに揺れ出したのは、ゼファの身体が、抜き差しする余裕もないほど狭いからだ。しかし、感度は良く、浅い突き上げにも敏感に反応して、かすかな痙攣を繰り返す。そのたび、脈を打つように、柔褰がうごめく。

エドラントが感じ入るように息を吐き出した

「本当に、敏感な身体だ……。わかるか。いま、おまえの中に芽生えている感覚が『快感』だ」

ゼファのくちびるを舌先で舐めて、エドラントは両腕を寝台へついた。

「ん……」

差し込まれる角度が変わり、走り抜ける快感にぞわっと背筋が震える。

ひと息ついた男の顔を、ゼファは戸惑いの中で見た。疑問が脳裏をよぎったが、言葉にならないうちに、肉棒がゆるく引き抜かれ、またぐいと押し込まれる。

生まれ出たせつなさが滲み、ゼファの腰あたりに広がった。

刺激に敏感な内壁は、わずかな動きにも快感を得てうごめく。エドラントも息を吐いた。

そしてまた、腰を引く。

「あ、あっ……あ」

ずりっと肉がこすれ、足を開いて受け入れているゼファは震える。

抜いては突かれ、突いては引かれ、そのリズムは緩慢だ。ゆえにゼファの羞恥を煽る。

肌がひとときに火照り、汗が滲み、目の前がかすんだ。

アルファに抱かれているという実感は、ゼファに対して屈辱しか与えなかった。たった一度だところえて受け入れる破瓜の儀式だ。だれにも知られることのなかった欲望が暴かれ、まっさら

な身体に道がついていく。

愛されて求められる初夜を想像したことはない。

ローマンという限り、ゼファはただの男性だった。胸の膨らみがない代わりに、下半身に突起物がついている。ただそれだけのことだったのだ。

「あ、ああ……ッ、あ、あっ」

揺さぶられて刻まれる自分の声は、他人のもののように思われたが、身体に与えられる淫らな快楽は、間違いなくゼファの感じているものだ。

抗いがたく、全身に痺れが回り、こらえてもこらえても嬌声が溢れ出す。

ゼファにも同じ形状のものがついているのに、エドラントのそれは比べものにならないほどに猛々しい。見るからに役割が違っていた。

アルファとオメガの違いをいまさらに突きつけられ、ゼファの両目から涙がこぼれた。

「ん、く……っ」

引き締まった細い足の、その先の指で寝具の布を蹴り乱す。

「気持ちいいだろう？ おまえの中はいやらしくうねって……、見た目よりも淫らだ」

男の声が耳をなぶり、羞恥を感じたゼファはのけぞるようにして身悶えた。

「言わ、ないで……っ」

強い口調で拒絶を示し、奥歯を噛みしめる。言われるまでもなく、わかっていた。だから、言葉にされたくない。

アルファであったならば、いま頃ゼファは王座に即いていた。

オメガだったばかりに、王宮を追われ、朽ちた館で身を潜めて生きるしかなかったのだ。

「あ、ああっ……」

ぐいっと強く挿入され、呼吸が奪われる。

ゼファは顔を背けて寝具へすがった。

抜き差しを繰り返すごとに、エドラントを包むゼファの身体はほどけていく。淫らな脈は、肉壁と象徴の両方で起こり、蜜壺のように濡れた肉がエドラントに絡みつく。そのたびに、ゼファは屈辱を感じた。しかし、身体は興奮を募らせるばかりだ。

折り重なったエドラントが動くと、そり返ったゼファの象徴は彼の逞しく鍛えられた下腹になぞられて跳ねた。

もどかしい快感だ。いくつもの感覚が連動して、ゼファはひとつの望みに飢えていく。

ふたりの身体の間で放って置かれている自身を、激しく揉みしごかれたかった。

内側も、屹立も、どちらも、ゼファの心を置き去りにして、あけすけな快楽を求めている。

「どうして欲しい。身代わりの姫」

からかいが耳元をくすぐり、ゼファは顔を背けた。エドラントがまじまじと見つめてくる。その気配に目をぎゅっと閉じた。

「好きなようにしているがいい。私も好きにさせてもらおう」

退屈そうに言ったあとで、エドラントは大きく腰を動かした。いままでの行為が遊びのようなものだと、一瞬でわかる卑猥さだ。ゼファは小さく声をあげて、エドラントを見た。

快樂を貪ろうとする傍若無人な動きに、愛情は感じられない。そんなものは、初めから微塵も存在していなかった。

ふたりの間にあるものは、単純な肉の悦樂に過ぎない。

だからゼファは、汚されていると感じた。真っ白だった自分の身体が、得体の知れない感覚を受け入れ、ドロドロと淀んだ淫靡さに染まっていく。

エドラントの言う通り、それが快樂だった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>